

平成28年度 栄東中学校入学試験問題

東大クラス選抜Ⅰ

〔国 語〕 (50 分)

受 験 番 号	
整 理 番 号	
氏 名	

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題用紙の表紙を上にして、静かに待ちましょう。
2. 試験開始の合図があったら、問題用紙と解答用紙のどちらにも受験番号と整理番号と氏名を必ず記入してください。
3. 問題用紙は、表紙を除いて全部で21 ページあります。ページ数を確認しましょう。
4. 答えは、すべて解答用紙に記入してください。
5. 印刷のはっきりしないところなど、質問事項があったら、だまって手をあげて監督かんとくの先生に聞きましょう。
6. 試験中、気分が悪くなった場合には、監督の先生に申し出てください。
7. 試験が終わったら、問題用紙と解答用紙は別々にして、整理番号順に監督の先生の指示にしたがって提出してください。

一 次の各問いに答えなさい。

問一 次の(①)～(⑩)の中に入る言葉として適切なものをあとの【語群】から選び、それぞれ漢字に直して答えなさい。ただし、同じものを二度用いてはいけません。

1. ここにはさまざまな行政(①)が集まっている。
2. 今年は(②)な天候が続いている。
3. 彼は(③)で物事を決める。
4. 教室をそうじするため机を(④)させる。
5. 小学校の(⑤)を終え、この春いよいよ中学校に進学する。
6. アマゾン川流域の(⑥)の動物を観察する。
7. 国連(⑦)を守ることが世界平和への道だ。
8. 大学では地球温暖化を(⑧)に研究している。
9. 日本代表選手の活躍に(⑨)した。
10. 今日の話の内容を(⑩)にまとめる。

【語群】

イジョウ	イドウ	カテイ	カンケツ	キカン
ケンショウ	コウフン	センモン	ドクダン	ヤセイ

問二 次の文の文節数を算用数字で答えなさい。

一番上の兄が楽しそうに今日の学校での出来事を母に話している。

問三 次の1～3の――線部と同じ種類の語が使われている文を一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

1. 世にも奇妙なことがおこっている。

ア この材質はやわらかくない。

イ 父の口調はおだやかでない。

ウ 子供でなければゆるされない。

エ ここは栄東中学校だ。

オ 彼女は涙もろい性格だ。

2. 未知の世界を想像するの面白いものだ。

ア 寒いのが寒くないのって。

イ 彼の言うことは信じられない。

ウ 桜の咲く季節となった。

エ サッカーがうまいのが彼の持ち味だ。

オ 外国での生活にも慣れてきた。

3. 彼の足はそんなに速くない。

ア ろうかは走らないように気をつけよう。

イ 言葉で表現するのは簡単でない。

ウ 規則正しい生活をしないと、健康を害する。

エ 誰に対しても変わらない態度で接する。

オ ぼくはそんなに早く行けない。

問四 次の――線部の言葉の使い方が正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不正を許さない彼の姿勢は、虎の威を借る狐として恐れられている。

イ 新しく就任した社長を、社員全員で三顧の礼を尽くして迎える。

ウ 人の体験は他山の石なので、実際に自分で体験してみないとわからない。

エ この作品は細部にわたり工夫されていて、画竜点睛を欠く作品となった。

オ 賛同者に恵まれず四面楚歌となったが、根気よく説得を続けた。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

不自然な経済社会の出現

物質的には、すなわち物資とエネルギーの使用に関しては、人間はもっと簡素に、ほどほどに生きるということを、今後、真剣に追求しなければならない。健康にかつ快適に生きられる。あくまで、そこが基本となるべきである。

物資とエネルギーは自然からの贈与であることを忘れてはならない。飽くなき快適さ、便利さの追求は、この自然からの贈与を浪費することである。浪費は自然破壊を惹起し、自然破壊はやがては人間自身の滅亡を誘発しうるであろう。

経済活動の基本には倫理が必要である。経済活動とは、本来、人間が生きるために必要とする衣食住のための物資の確保であった。¹ 富の蓄積がこの本来の目的を超えて自己目的化したとき、^a 際限のない富の蓄積が始まる。それがさらなる欲望の暴発を引き起こし、不自然な経済社会が出現する。

不自然な経済社会は、人間のための経済社会とはならない。経済は、その本来の目的を想起すべきではないか。誰のため、何のための経済なのか。経済は、人間がよく生きること仕えるべきものではないか。

いま「よく生きる」とは

では、人間は何を喜びにして生きるのか。それは、他者との交わりである。他者を愛すること、他者から愛されること、他者を助けること、他者から助けられること、それが人間の喜びである。他者（人間）は自由な存在者として無限の高みに立っている。その他者から声をかけられ、手を差し伸べられ、助けられ、愛されるということは、自分自身の力では獲得できない畏るべき肯定を贈られることであり、それ故に、畏ろしい喜びをわれわれに与える。まさに、このことが、逆説的にも、この大災害のときに、明らかになつたのではないか。

津波の惨状に際会して、肉親を失った人びとの悲しみと絶望はわれわれの胸を締め付ける。生きていることの絶対的な意味、富や名誉などは言うもおろか、なにか素晴らしい仕事を成し遂げたということさえ吹き飛んで、ただ生きているということの絶対的な素

晴らしさが、われわれの胸に突き刺さる。

大災害に出遭い、家も富も一切を奪われて、人間は本来なにもたない裸の存在であったことを突きつけられる。そのとき、人は人に自己をありのままに露出して、無力な自己を露出して、助け合う。誰も、他者を支配しようとしたり、利用したり、ましてや暴力を振るおうなどとはしない。極限の無二物、裸一貫が人間のありのままの姿を見せ、そこで、人と人は信頼と愛によって助け合う。

すべてを失った人びとが身を寄せ合って助け合っている姿、外国からさえ人びとが助けに来る姿——北方四島の帰属問題で関係が冷えていたロシア、尖閣諸島の同じ問題で険悪な関係に陥っていた中国、これらの隣国が救援隊を送ってくれたニュースを、重く受け止めなければならない——ここに人間の生の根源の姿がある。

大災害の苦しみのなかで、人間の本来の存在の意味が問われているのではない。2、十分な物資をもち、豊かに生きていくときでも、本来、人間は、富や名声や快楽によって、生の真の充足を経験しているのではないだろう。そうではなくて、本当は、人と人は愛と信頼によって生きているのである。このことが、実は、富や地位や名声や快楽によって遮断され、見えなくさせられているのである。

そして、もしも技術文明が本当の生に対するこういう増殖物を無限に増大してゆくことならば、文明は人間から生の本当の喜びを奪うものにほかならないだろう。科学技術文明の進歩は、生の単純な意味（人と人との信頼と愛）のコントロールの下になければならない。

人間の未来のために

今回の大災害に際して、世界各国から多くの支援の手が差し伸べられた。これは、他者の苦しみに走り寄る、人間の本性的な惻隱の情の現れであろうが、それ以上に、人類の連帯の絆の成立のきっかけと思いたい。

現在、経済、学問、政治、宗教などのすべてにわたり、地球は一つの世界として結合し、交流しつつある。それを、苦しみの撲滅、3、争い、暴力、貧困、戦争の撲滅に向かつて、いまこそ人類の連帯へと絆を深めていく必要がある。この大災害に際し

て、世界中から寄せられた同情の経験を、私たちは、これからの地球のために生かさなければならぬ。

人間の敵が人間であってはならない。国際間の争いを暴力による威嚇によってではなく、理性的な話し合いによって解決する、そのような国際社会のあり方を具体的に構想していく——そうした構想へと向かうとき、今回の禍の経験が希望の土台となりうるのではないか。

この大災害は、人間の生き方を根本から考え直す機会を人類に与えた。もしかしたら、もう半ば手遅れなのかもしれないと危惧されるとしても、それでも、プラトンの言い方を真似れば、祈りながらあるべき道を探し求める以外にないだろう。

アウシュヴィッツの大虐殺と広島・長崎への原爆投下を犯してしまった人類は、もう償うことの不可能な罪を犯してしまったのかもしれない。そうではないとしても、それを充分に反省しない人類には、多分救いはない。

しかし、心ある人びとは贖罪の業に、祈りながら、励むことはできるだろう。その祈りと贖罪の業が天に嘉せられるかどうかは、誰にも分からない。

ただ、今回の禍が明らかにしていることは、人間が、このまま、何の反省もなしに、欲望の拡大と利己主義を続ければ、もはや地獄しかないだろう、ということである。

禍を人間の未来への希望にどうつなげるか。「人はいかに生きるべきか」。このソクラテスの問いが、現代に重く投げかけられている。

（岩田靖夫『人間愛』の社会へ）より

*1 惹起……問題などを引き起こすこと。

*2 際会……思いがけず出会うこと。

*3 惻隱……かわいそうに思うこと。

*4 威嚇……実際の攻撃でなく、それに似た姿勢を見せることで対象をおどすこと。

*5 危惧……あやぶみ、おそれること。

*6 贖罪……………つみほろほし。

*7 嘉せられる…よしとしてほめたたえられる。

問一

1	3
---	---

 に入る最も適切な語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア しかし イ すなわち ウ それとも エ だから オ ところで

問二 〓線部 a・b の言葉の意味を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a. 「際限」

ア 際立きわだつこと イ かぎり ウ 種類 エ 飾かきること

b. 「無一物」

ア 同じものがないこと イ 一つしか持っていないこと ウ 価値のないこと エ 何一つ持っていないこと

問三 〓線部 1 「自然からの贈与を浪費する」とありますが、例えばどのようなことですか。あなたが知っている例を、十五字以内で答えなさい。

問四 〓線部 2 「経済は、人間がよく生きること仕えるべきもの」とありますが、経済が人間に仕えるとはどういうことですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間が健康で快適な生活を追求するためには、経済との関わりは必要ないということ。

イ 人間が豊かに生きるためには、ある程度の経済による自然破壊もやむを得ないと考えること。

ウ 人間がほどほどに生きるために必要とする、衣食住のための物資を経済が確保すること。

エ 人間が富や名声を手に入れるためには、経済活動が重要であるということ。

オ 人間が社会を形成するための基本として、経済はなくてはならないということ。

問五 〓線部 3 「生の本当の喜び」にあてはまらないものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 人類の連帯の絆を深めること。 イ 愛と信頼によって生きること。 ウ 富や名声や快楽を得ること。

エ 健康にかつ快適に生きること。 オ 大災害から命を守れること。

問六 〓線部 4 「そうした構想へと向かうとき、今回の禍の経験が希望の土台となりうるのではないか」とありますが、筆者がどのように考える根拠こんきょとして具体的な出来事が書かれている形式段落を、「人間の未来のために」より前から探し、本文中からはじめの五字を答えなさい。

問七 〓線部 5 「人はいかに生きるべきか」というソクラテスの問いに対して筆者はどのように考えていますか。「自己」と「他者」という言葉を用いて、五十字以上六十字以内で答えなさい。

問八 次のア～オを読み、本文の内容に合うものにはA、まちがっているものにはBとそれぞれ答えなさい。

ア 科学技術の進歩がめざましいので、人間は底知れぬ力を持つ自然に対して畏れる必要はない。
イ 物資とエネルギーは自然からの贈り物であり、その浪費によって人類の危機が迫ってくる。

ウ 今回の大災害は、皮肉にも人間の生き方を見つめ直すきっかけとなった。

エ 人類は償うことが不可能な罪を犯しており、国際間の連携を望むのは難しい。

オ 大災害に遭うと人は自己をありのままに露出し、欲望の暴発を引き起こすことがある。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。字数指定のある問いは、句読点などの記号もすべて字数にふくみます。

「えーと、なんにするかな？ お茶漬^つけか、いや、おにぎりにしよう。鮭^{さけ}とおかがいいな」

「お父さんって、ホント、お米大好きだよね？」

「最後は米を食わないと、なんか、こう、胃が落ち着かない。それに力が出ないだろう」

「力が出ないねえ……」

注文したおにぎりは四角い皿に載^のせられて運ばれてきた。黄色い沢庵^{たくあん}が二切れ添^そえてある。

「なあ、亜季^{あき}、お前、覚えてるか」

父は感慨^{かんがい}深げに手にしたおにぎりを見つめながら尋^{たず}ねてきた。

「ん？」

「一度だけ、お前たちにおにぎりを、いやお弁当を作ってあげたことがあったなあ……」

「そんなことあったっけ？」

「あったよ。お前が六年生で、久司が四年生のときの運動会だった」

「運動会？ あっ……」私は思わず顔を歪^{ゆが}めてしまった。

「あの朝、お母さんの悲鳴で目が覚めた。一瞬^{いっしゆん}、何が起ったのか分からなくてびっくりしたけど……。お母さん、ベッドから起き上がった途端^{とたん}にギックリ腰^{こし}やつちゃってな。そのまま身動きできなかった」

私も弟もぐっすり寝^ね込んでいたので、まったく気づかなかった。

「それでもお母さんは偉^えいな。お前たちのお弁当作^{つく}るって言って台所へ這^はって行こうとしたんだから。でも、どう見ても無理だったし、つい、オレが作るって言っちゃったんだな。弁当っていうか料理だって一度も作ったことなんかなかったのに。でもな、おにぎりと卵焼きくらいなら作れるかって思ったんだよ。で、一応、お前たちに持たせてやることができたけど。後にも先にも、あれが最初で最後の弁当作りだったなあ」

どこか満足そうな顔で話をする父にはすまないけど、それはあまり思い出したくない思い出なのだ。¹

私は足が遅かった。いや、中途半端に遅いというのが正しい。それまでの徒競走では三着以内に入ったことがなく、ギリではなかったものの四着や五着が定位置だった。

うちの小学校では、一着から三着までは、順位の数字が染め抜かれた赤い旗の列に並び、それ以外は白い旗の列に一緒くたに並んだ。何も一着などとは言わない、でも一度でいいから、ちゃんと数字のある旗の列に並びたいと、ずっと思っていた。

六年生の運動会で、そのチャンスが巡ってきた。組み合わせの妙なのだが、予行練習では三着に入れた。私は密かに本番を心待ちにしたのだ。

当日の朝、母が腰を痛め、運動会に来られないことを知ったときは、さすがにがっかりしたものだ。それでも、父がビデオに撮ってくれば、私の走りを母も見ることができると、一層頑張ろうと心に決めて登校した。

午前中のプログラムが終了して、昼食タイムになった。食事はクラス毎に広げられたシートの上で摂る。仲良しの女子五人で車座になった。

²「お父さんが作ったんだからな」

出掛けに、そう言われて父から手渡されたお弁当の包みを、なんの躊躇もなく解いた。タッパーの中には、海苔に巻かれたおにぎりがふたつと卵焼き、ウインナーが無造作に入っていた。それだけ聞けば、ごく普通の内容なのだが、それはふと目に入った他の子たちのそれからすると、酷く見栄えが悪く見えるものだった。みんなのお弁当に入ったウインナーは、タコの形やウサギの形であったり、プチトマトやブロッコリーといった野菜が入って彩りもよかった。

そうだよ、これ、お父さんが作ったんだった……。

でも、それだけなら隠しながらでも食べていたかもしれない。ところが……。

「沢村のおにぎり、でっけー、ヘンな形っ」

目敏いクラスメイトの男子が、私のお弁当を背後から指差し、囁し立てた。

当時の私にしてみれば、そのひと言で充分に傷ついたのだ。そして父に対して腹を立てた。

私は「なんかおかしい……」と、周囲に聞こえるように言い訳すると、蓋をして片付けてしまった。

六年生女子の徒競走は二時半くらいに始まった。

スタートのピストル音が響く中、どきどきしながら順番を待っていると、グルグルッとおなが鳴った。声援が飛び交い、音楽が流れていたにも拘らず、それははつきりと聞こえた。朝食べたトーストはとくに消化され、お弁当を食べなかったせいで、かなりおなががすいていたのだ。

隣に座っていた雅代ちゃんが「亜季ちゃん、おながが鳴った」と笑った。その声につられるように、他のクラスメイトからも笑いがこぼれ、緊張の場が一気に和やかな雰囲気包まれた。顔を紅くした私以外は……。

そんな恥ずかしさを引きずったことと、きつとおなががすいていたことも災いしたのだろう。スタートで出遅れた上に、力が出ずに挽回も叶わなかった。結局、五着に終わり、数字の染め抜かれた旗の列に並ぶことはできなかったのだ。おまけに、そんな私の気持ちも何も知らず、ビデオカメラを向ける父に気づき、無性に腹が立った。

こんなことになったのは、お父さんが作ったお弁当のせいだ。そう思った私は下校の途中で、友達と別れると、お弁当の中身を道端の側溝に捨てた。明らかな八つ当たりだったのだが、悔しくて、情けなくて、涙が出た。

今となつては、父のおにぎり事件も笑い話になっていいのかもしれない。なのに、なぜか腹立たしい気分になった。そのせいで、乗り込んだ中央線の車内では黙り込んでしまった。

「どうした？」

「別に。久しぶりに飲んだせいかな」

目の前に空いた座席を父に譲り、吊り革につかまりながら、父のオデコに向かって、³「まったくと微かに呟いた」。

武蔵小金井駅の改札を出て、シャッターの下りた商店街に沿って歩く。

「うー、結構、寒いね」

「そうか、長野よりは随分と暖かいけどな」

「そりゃあ、そうでしょう」

マンションのエントランスに灯りが見える。中古物件とはいえ、まだ築五年だ。ぱっと見では新築とそう変わらない。

「ここよ」

エントランスのテンキーに暗証番号を打ち込み、ガラスドアを開けた。

「オートロックか、なら安心だな」と、父は指差し確認の動作をする。

エレベータに乗り込み、五階へ。

通路に設置された消火器を見ると、再び指差し確認をした。この調子では、部屋に入った途端、あちらこちら、指を差して回りそううだ。

「もう、いちいち、そうやって指差さないでよお」

「すまん、すまん、つい癖が出てな……」父は額に手を当てた。

ドアの鍵を開け、灯りのスイッチを押す。下駄箱の中から来客用のスリッパを取り出し、上がり框の縁に揃えた。

「どうぞ」

「じゃあ、邪魔をするぞ」

廊下から居間に入った父は、ゆつくりと室内を見渡した。

「ほほお、こりゃあ、ひとりで住むには立派な部屋だなあ」

「そうかもね。あ、適当に座って」と、ソファを勧めた。

ところが「お、そうだ、野沢菜、冷蔵庫に入れておくぞ」と言うと、つかつかと台所に入って冷蔵庫の扉に手を掛けた。

「あ、いいから、私がやるから。勝手に開けないで」

慌てて父を制したものの遅かった。父は冷蔵庫の扉を開けていた。

「はあ、なんだ、これは……」父が大きな溜息をついた。

だから、やめてと言ったのに……。

「なんにも入っていないじゃないか……。お前、ちゃんと食っているのか」

「普段は外食だし、減多に料理もしないもんだから、さ」

父は台所を一周見渡した。

「ご飯だって炊いたこともなさそうだな」

「お米は一応、買ってあるんだけどね。ひとり分炊くのもなんだか面倒で」

「そうかもしれないが……」

「あ、お風呂入るでしょう」

私は父の言葉を遮って、台所の壁に設置された給湯システム器のお湯張りボタンを押した。

「お風呂溜まるまでお茶でも飲む？　って言っても緑茶のティーバッグしかないけど」

「ああ、じゃあ、いただくかな」

水栓レバーを上げ、二杯分の水をヤカンに入れると、コンロに掛けた。

うちには湯飲み茶碗がないので、マグカップでお茶を淹れて、食卓の椅子に腰掛けた父に出した。

「お前、お母さんに頼んで、湯飲み茶碗を焼いてもらったらどうだ？」

「いいって」

そう言って、私は父と向かい合わせに座った。

父はお茶をひと口啜ると、カップを置いて「なあ、亜季。お前、ちゃんと寝てるのか」と訊いてきた。

「はあ？」

「ここんところにクマができてるぞ」と、父は自分の目の下を人差し指で突いた。

「もう、ヤーね。そんなところ気づかなくてもいいのに」

「だけどな……」

「ちゃんと寝てるよ。いや、寝てるつもりだけど……。ただこの頃、ちょっと忙しくてさあ」

「そうか。いや、その、お母さんが少し心配してたもんだからな。亜季が、仕事が大変だってこぼしてたって」

この間電話したとき、つい口を滑らせ、仕事のことを母に愚痴つたのだ。余計なことを迂闊に喋れば、やはり父に筒抜けになってしまう。

「仕事、うまくいつてないのか」

「まあ、そりゃあ、私だって、色々あるんだから……。まあ、キツいときもあるにはあるけど」

「仕事っていうのはそういうもんだからな……」

父はひと口お茶を啜ると「お前、戻って、向こうで働くつもりはないか」と、真面目な顔で切り出した。

「え？」

「もし、そういうことも考えられるなら、お父さんが現役の間に言ってくれ。大した力はないけど、現役の間なら少しは顔が使える」と、父は続けた。

「何言ってるのよ、大体、どんな職を用意できるっていうのよ」

「いや、まあ、そうなんだが……」

「ほーら、いいかげんなこと言わないで。そりゃあね、ハリウッド映画なら、窮地に追い込まれた娘を颯爽と、かつ勇敢に救い出すようなスーパーパパさんっていう設定もアリかもしれないけど、実際、私の場合、お父さんだもの……」

ちよつと言い過ぎた。そんな自覚があった。

「まあ、そうだな。お前の力にはなれんか。心配するくらいが精々ってところだものな」父は淋しそうに目を伏せた。

「気に掛けてくれるだけで充分有り難いわよ。でもね、私のことは放っておいてくれないかな。大丈夫だから、ちゃんと考えてることもあるし」

すると、電子メロディーが流れた。お風呂が溜まった合図だ。助け船が有り難い。

「お風呂溜まったから、お父さん、先に入って。私はそっちの和室にお布団敷いておく」

「そうさせてもらうか。ま、老いては子に従えってことだな。でも、子どものためにしてやれることが少なくなるっていうのも淋しいもんだ」

父はそうぼそぼそと言うと「どっこいしょ」と腰を上げ、旅行鞆の中から、グレーのスウェットを取り出した。

「バスタオル、用意しておくから」

「おう」

「私は、まだやることがあるんで、上がったら、気にしないで先に寝ちゃっていいからね。あ、電気消すのだけ、お願い」

「おう」

軽く手を上げて脱衣所に向かう父の背中が妙に小さく見えた。いや、そうさせてしまったのは私なのかも……。しかし、いくら親子といえども解決できないものもある。私だって、父に手助けしてもらってどうにかなるようなことなら頼ってみたい。

和室に父の寢床を用意し、私は自室に入った。

普段なら、食卓に参考書やパソコンを広げて勉強するのだが、そういう姿を父に見られなくなかった。

「さあてと、気合い入れよう」

上着を脱いで、ゴムで髪を後ろ手に束ねた。カーペットの上に座り、ベッドの縁で背中を支える。折り曲げた膝の上で参考書を開いた。窮屈な体勢だが、今夜のところは仕方ない。

しばらくすると、父が風呂から上がった気配がした。

「無理せず、ちゃんと寝ろよ」ドア越しに父が声を掛けた。

「うん、分かってる」ドアを開けずに答えた。

「じゃあ、おやすみ」

「はい」

困ったことに、集中しようと思ってもそれができない。ビールを飲んだせいもある。いや、慢性的な寝不足のせいだろう。ベッド脇に置いた目覚まし時計の針の音は、まるで催眠術師の言葉のように瞼を重くする。

こんなことで眠ってたら……。だめじゃない、私……。

自分のくしゃみに驚いて目が覚めた。

「うわっ」

いつの間にか床に突っ伏して眠ってしまった。

顔を載せた腕が痺れている。顔を上げて口の周りを拭う。部屋の電気は点けっ放しだ。

一体、何時？ 一時間くらいしか寝た感覚はなかった。ところが、目覚まし時計を手にとると十時を回っていた。

ええっ、朝？ あ、お父さんは？

我に返り、慌てて居間に出た。カーテンの隙間からオレンジ色の光が漏れている。

周りを窺ったけど、父の気配はどこにもない。和室を見ると、布団がきちんと畳まれていた。

黙って行っちゃったんだあ……。私は食卓の椅子に力なく腰掛けた。

すると、ラップの掛かったお皿があり、白く丸いものがふたつ載っていた。おにぎりだ。そして、その脇にメモ書きが残されていた。いや、これは手紙だ。

亜季へ

声を掛けたが寝ているようだったので、そのままにしておいた。

突然出て来て、泊めてもらってすまなかった。しかし、久しぶりに亜季と話せてよかった。まだ話し足りなかったけど、また今度。

お父さんとお母さんは、遠くにいても、いつもお前のことを気に掛けている。親は子供のしあわせを一番に願うものだ。それは本当だ。

忙しいだろうけど、健康だけには気を使うように。

それからちゃんとちゃんとメシを食え。腹が減ってはイクサはできぬだ。

お母さんのようには上手く結べないが、おにぎりを作っておく。海苔が見つからなかったので、塩のおにぎりですまないが、お母さんの野沢菜と一緒に食べなさい。

勝手に台所をあっちこっち探して、またお前に叱られそうだが、許せ。

それから、多めにご飯を炊いてしまったので、おにぎりにしてフリーザーの中に入れておいた。おなががすいたときに、チンして食べなさい。

残念ながら、親としてお前にしてあげられることは少なくなった。これくらいのことしかできないが勘弁してくれ。インフルエンザに注意するように。今年は暮れに帰省するように。みんなで年越し蕎麦を食べよう。

父

夢うつつの中で、何か物音がしていたような気がしたけど、それは夢ではなく、父が台所に立っていた音だったのだ。フリーザーを開けると、ひとつひとつラップに包まれたおにぎり……。いや、ボールのように丸いご飯の塊がたくさん詰まっていた。

食卓の上のおにぎりに手を伸ばす。それは運動会の日に作ってくれたものと同じように、なんとも大きくぶかつこうな姿をしている。

「お父さん……。おにぎりは三角形だって知らないの？ もう、ばっかじゃないの……」

可笑しくなつて、そんなふうに悪態をついた。

大きな口を開けてかぶりついた。少し塩っぱく感じたのは、父が塩の量を間違えたのではない。目尻から溢れた温かい涙の味だ。
「今度はちゃんと食べるよ、ひとつも残さずに……」

(森浩美『家族ずっと』より)

問一 ―線部1「それはあまり思い出したくない思い出なのだ」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「思い出」の内容が描かれているのはどこまでですか。その終わりの五字を本文中から抜き出さない。

(2) 「思い出したくない」とありますが、それはなぜですか。その理由を二つ挙げ、それぞれ「―思い出したから。」という形に合うように、の中を十字以上二十字以内で答えなさい。

1つめ 思い出したから。

2つめ 思い出したから。

問二 ―線部2「お父さんが作ったんだからな」とありますが、ここでの父の心情を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 料理をしたこともない自分が初めて作ったお弁当なので、出来栄には期待されても困ると開き直っている。
イ 初めてでも何とかお弁当を作り上げることができたので、娘の力になったような心地がして得意になっている。
ウ 本当なら母親が娘のために彩りよいお弁当を持たせてくれるはずが、そうもいかなかったので娘をふびんに思っている。
エ 自分なりに頑張って作り上げたお弁当ではあるが、娘が喜んで食べてくれるかどうか心配で、緊張している。
オ したこともないお弁当作りをきちんとやりとげたのだから、娘には感謝されて当然だろうと思いつている。

問三 ―線部3「父のオデコに向かって、まったく」と微かに呟いた」とありますが、ここでの亜季の心情を説明したものとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア かつてのいやな思い出をいまだに引きずって、父に対して素直になれずにいる自分が情けなく、いらだちを感じている。
イ 気分がすぐれない娘の前で、平然と座っていられるような遠慮を知らない父の態度をにがしいと感じている。
ウ 昔は父の無神経ぶりに腹も立ったが、今ではそれとなく私に気を遣う優しさも感じられて、父をどこか憎めないでいる。
エ 昔の話を満足げに持ち出し、あいかわらず私の気持ちを理解していない無神経な父の姿にあきれる気持ちを隠せずにいる。
オ 運動会での失敗の原因を父親に求めている自分を振り返って反省し、もう父のことを許そうかと考えあぐねている。

問四 ―線部4「父が大きな溜息をついた」とありますが、それはなぜですか。このときの父の心情をふまえて三十字以上四十字以内で答えなさい。

問五 ―線部5「『お前、戻って、向こうで働くつもりはないか』と、真面目な顔で切り出した」とありますが、父がそのようなことを口にしたのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 実家に帰って両親と一緒に暮らすようになれば、娘も食事に不自由することはないだろうと考えたから。
イ 仕事の愚痴をこぼして弱気になっている娘の、今の仕事にかける覚悟を問いただしてみたかったから。
ウ 定年退職を間近にひかえ、年をとった自分たちの面倒を、実の娘に見てもらえれば安心だと思ったから。
エ 疲れ果てている娘に、新しい環境を用意してあげることと父親としての信頼を取り戻せると考えたから。
オ 仕事のことで悩んだり、無理をしたりして苦勞する娘の様子が、離れている親として心配に思われたから。

問六 ―線部6「いや、そうさせてしまったのは私なのかも……」とありますが、亜季がそのように考えているのはなぜですか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分なりにきちんと生活ができている自負があり、父が手助けする余地を^{あた}与えようとはしなかったから。
イ 父を早く寝かせるような準備をすることで、父との会話を避^さけるような態度を意識的にとっていたから。
ウ 娘の力にはなれないのだ、と父に気付かせるような言葉を投げかけたことに、負い目を感じていたから。
エ 父に対して思わず強い口調になったことが、二人の間に大きな隔^{へだ}たりを生んでしまったと感じていたから。
オ 父をやせ衰^{おとろ}えさせるほど、自分は父に心配をかけていることを今になって初めて気づくことができたから。

問七 ―線部7「それは運動会の日に作ってくれたものと同じように、なんとも大きくぶかつこうな姿をしている」とありますが、大きなおにぎりに込めた父の思いを三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問八 ―線部8「今度はちゃんと食べるよ、ひとつも残さずに……」とありますが、ここでの亜季の心情を五十字以上六十字以内で説明しなさい。

東大クラス選抜Ⅰ

解答用紙
(50分)

氏名

受験番号

整理番号

得 点

受験番号

整理番号

得点

A

B

C

D

E

F

G

H

I

J

K

L

一		
問二	問一	
	6	1
問三		
1	7	2
2	8	3
3	9	4
問四	10	5

二									
問八	問七			問六	問五	問四	問三	問二	問一
ア								a	1
イ								b	2
ウ									3
	50								
エ									
							15		
オ									
	60								

[illegible]